

第二期 第五十一号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2020. 10. 20 定有堂書店 発行

コロナ・デイスタンスな日々

奈良 敏行

こんにちは。君は女です。

三浦 永理

オンライン授業／読書会 雑感

丸 祐一

ボブ・ディランからドミニク・チェンへ

『会社の人事』

松田 裕史

サラリーマンの死

三砂 慶明

夏のジャングル

萩原 俊郎

八代日記 (七)

鳥居 貴彦

おあついのがお好き

齊藤 仁昭

鳥取あれこれ その五十

ムラカミヒロミ

戦禍と楽人 (一)

内田 克彦

マンデルブロー没後10年

秦草 梅林

耽読者の家

芝野 浩貴

ごはん

古賀 啓三

おみやげと替え玉

あきの素生

…… 編集後記



コロナ・デイスタンスな日々

奈良 敏行

(定有堂 店主)

先日、数冊の本をレジに持ってきた若い男の人が、「ちよつと買いすぎたようなので一冊やめる」と、『スモールハウス』(ちくま文庫)を外そうとした。ふと「この本やめないで、そっちの本を止めにしたら」と言ってしまった。「どうして?」と問われたので「たくさん買ってるそれらの本つながりだと、この本が中心に思えるから」と答え、結局余分に買ってもらった。

『スモールハウス』は、定有堂の品揃えの「窓」「入り口」だと、機会あるごとに説明している。定有堂には限られた本しかない。本が少ないと思う人もいるし、いやとても多いという人もいる。マジョリテイから見ると、なんでもあつて欲しいし、網羅的でないこと自体に不満が生じる。マイノリテイから見ると、自分が興味がある分野は豊かなような感じもする。好みにはまるか、はまらないかの話だが、本屋にとっては重大事だ。で、まず

マジョリテイとマイノリティを逆転する「窓」が必要となる。つまりこの入り口をくぐり抜ければ少数派が多数派になる。その「窓」の一つが『スモールハウス』だ。

ここでは「シンプル」がテーマだ。スモールハウスと
いうのは「タイニーハウス」ではない。後者は具体的な
「狭小住宅」だが、「スモール」は「こころ」の引き算
の方向で具体的な住居形態ではない。著者の高村友也さ
んは、「自分の死」という観念がその方向性へと駆動さ
せるという。「『死』の観念によって暴力的に生活から
引き剥がされ、自分に対して誰か別の人も眺めるよう
な強烈な匿名性を強いる」と言っている。つまりシンプ
ルとは「ライフラインを外す」ことの述語で、「離脱」
への手段なのだ。

コロナ禍の中「こんな状況でするので、ご遠慮させてい
たきます」という使い回しのきく便利な文言を知った。
これも「離脱」する言葉だ。人としてのスペックを少な
く設定する歩みへと誘われる。

ところで、現代日本の中国武術を牽引する老師の書物
に、「学を為せば日々増えていく、道を為せば日々減つ
ていく、減ってまた減っていく、『何もしない』に行き
着く」という言葉を見つけた。今日のレッスン（太極拳
教室）でいくつかこの老師の要諦のフレーズを紹介した
ら「何もしない」がすごいと声が上がった。わたしは「増

えない学び」があれば面白いと気になった。

最近、定有堂教室「読む会」で「会読」という言葉を知った。この概念を踏まえて三砂慶明さんが、筒井康隆の「耽読者の家」という短編を教えてくれた。品切れで入手できないが、幸い県立図書館にあった。遺産で膨大な蔵書付きの家を入手した伯父の住まいに若い男が居着いて読みふける。そのうち従妹のヤンキーあがりの女子大生も加わる。三人そろって「耽読」がはじまる。これも「スモールハウス」の物語だ。「シンプル」「離脱」のストーリーだからだ。

「音信不通」は「終わった」という気分から始まる。それは「逆転」の気分だ。マジョリテイとマイノリティの逆転だ。この逆転が文脈に構造を与える。『何もしない』が文脈を導いていく。しかしそんな思いもコロナ禍の中でその「一時停止」の気分に進み越された感がある。しかしこの気分は心地よい。「何もしない」ために何かをするということの、自由な出発（リスタート）が魅惑的だ。何にもならないけど「本」を読みつづけていいのだと思う。この入り口が「スモールハウス」だといったかったのかもしれない。「何もしない」方向への耽読の始まりだ。

どんな時でも活字を目で追うだけで心が安まる。内容は頭を通り過ぎるだけでも一向に構わない。有意的な言

葉でなくとも、意識が活字の轍にかみ合うだけで満ち足りる。昨夜は読むものがなく、手元にあった文庫目録(河出)を、寝床で開いた。リストで見つけても、その本を読むのはいまさら億劫だ。知ってる本は興がそがれる。知らない本には興味が失せる。この本を仕入れたらきつと売れると、エンピツで印をつけ始めると、目がキラキラしてきた。読むより売るのが楽しいと思うのは、十分「終わっている」証拠かもしれない。

2020. 09. 19

2

- 筒井康隆『壊れかた指南』 文藝春秋 2006
馬長勲『太極拳を語る』 BAB ジャパン 2018
高村友也『スモールハウス』 ちくま文庫 2018

「こんにちは。君は女です。」

『さよなら、俺たち』への返信

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

大学の最後の一年間、「宝塚歌劇で卒論を書きたい」という邪な思いから、ジェンダー学の教授のゼミにいた。

そんな私に弟が「姉さん、フェミニズムについて説明してくれない？」と急に言ってきたのは、去年の年末だった。簡単にだったが、フェミニズムとは元々女性の権利運動を指すのだと説明をしてみた。

年が明けて、正月。家族団欒の時、弟がまた同じ話を持ち出して、こう言った。

「結局、フェミニズムって何なの？姉さんの説明じゃちょっとも分からない。男性に対する脅威でしかないよ。」

このように、ジェンダーを学んでいたと公言することは、世間様から「クソフェミ」「権利意識の高い面倒な女」と思われることとほぼ同義である。ジェンダーの問題を男女関係なく、同じような視座で話したいと思っても、世の中はいつまでも二分されるだけで、その溝

は埋まらない。そんな軽い絶望感を感じながら、社会人生活を送っていると、「女性」として結婚、出産、キャリア、様々な選択の場が夢物語でなく、現実となつてきていることを実感する。

私が自分の性別について深く向き合うようになったのは、いつのことだろうか。

はつきりとは分からないが、少なくとも大学で再び共学の世界に入るまで、女子校育ちの私はすっかり男性の存在など忘れていたし、比較対象がないせいで、女性という区別への意識もあまり強まらなかった。

大学入学当初の私にとって、男性とは、もはや全くの未知な生き物だったし、とても残酷な人たちだった。かわいい女の子とそうでない側の女の子の扱いの差だとか、異性と同性の間での会話の違いとか、そういう世の中の当たり前は、私にとっては全く新しいもので、そのせいでナイーブに傷付いたりもした大学時代だった。

ただ、少なくとも、私がそもそも女であること、性別を意識し続けてしまう理由は、他ならない弟の存在があったからだ。

食器洗いを手伝わなくて怒られる私と、少しやっただけで褒められる弟。大学受験にあたって、私は女子大に

そのまま進学するものと思ひ込まれた一方で、弟のことは浪人してでもいい大学にいかせてやりたいと親が思っていたこと。夜遅く帰つても咎められない弟と、心配される私。

期待されることが少しだけ違うということを知っていた。彼は男で、私は女だった。

そんな私が出会ったのが、『さよなら、俺たち』（ヌタンド・ブックス）である。

恋話収集ユニット桃山商事の代表である清田隆之氏が執筆したエッセイ集だ。ただ恋話を聞いていくという大学生のサークル活動から、著者の自らのジェンダー意識を問いつける日々が始まり、その十年以上の日々を顧みるような内容である。

私がこの本を読み終えた時に沸き起こったのは、私たちは分かり合えずとも対話できるのではないかという希望だった。「男性」「女性」というくくりから脱して、個人として、このジェンダーの問題に向き合う、まさしく「さよなら、俺たち」という姿勢が可能にしうる対話である。

この本の中には、ジェンダーの問題を意識し始めた男性が過剰に自らの男性性を否定してしまう様子や、著者

自身が多くの女性から聞く奇妙な男性の行動を自らに重ね合わせて自戒する様子などが、惜しげもなく晒されている。すべての男性が著者のような考えの持ち主ではもちろんないが、ゼロではないという事実は、今まで私が一生埋まらないと感じていた溝に橋をかけるような感覚だった。

一方で、私は自らの考え方を恥じた。私の「男性」に対する絶望は、それこそ私が「さよなら、あたしたち」とできていないせいではないかと。「彼ら」と「男性」を一括りにして、分かり合えないと見限っていたのではないだろうか。それが読後にじんわりと涙してしまった理由だ。

もし、少し前の私に、大学に入って異性と出会い、混乱の中にいる私に声をかけるなら、こう言うだろう。

「こんにちは。君は女です。これから君の人生はいろんな「男性」に傷つけられたり、驚かされたりするでしょう。でも、それは必ずしもすべての「男性」に絶望する理由にはならないのです。人と人として向き合う人生が送れますように。そのためには、まずお互いに、その人格を認め合わなくては始まらないですけど。」

オンライン授業／読書会 雑感

丸 祐一

(法哲学者)

感染症流行のため読書会や研究会が軒並み中止となつてしまった。研究会や学会も、三四月に予定されていたものはほぼすべてキャンセルされた。大学も四月以降はほとんどオンライン講義になった。オンライン化にあつて、私の場合は、事前に授業を動画収録しクラウドにアップしておく、授業時間になったらアクセスして見ることのできるオンデマンド形式とした。オンデマンドであれば、私も学生も固定の授業時間に拘束されないの、夜中に収録さえしておけば、昼は比較的自由に時間を使うことができる。一見すると暇そうに見えたのかもしれない。会議の類いは授業時間に関係なく出席できるようになつてしまったので、逆にその拘束時間が増えたような気がする。学生にとっては、見たいときに動画を見ればよいのだから、自己管理さえしつかりできれば時間を自由に使うことができたはずである。セルフ集中講

義にして、成績評価の一週間前に集中的に講義を見てレポートを書いたとしても、それは一つの判断として認めることにした。動画視聴のリアクションペーパーもオンライン提出にしたので、出席管理はかなり楽になった。管理できてしまうので、通常よりも出席視聴したかどうかの確認にうるさくなつてしまつたくらいである。

遠隔授業の問題としては、友達と会うためだけに大学に来て、ついでに授業に出席することで生活リズムが保たれていたような学生にとっては、昼夜逆転して体調を崩してしまうこと、いつでも受講できるならばとブルブル受講しない可能性があること、わからないことがあつたときに友達同士で情報交換をすることが困難になつたということ、将来構想に影響するかもしれないロールモデルを見つけにくいこと、などがある。横のつながりと縦のつながりが失われている。私自身、まじめで優秀な同級生にノートを借りてなんとか単位を取っていた。もし大学時代にコロナ禍のようなことが起きていたら、かなり危機的な状況に陥っていたことだろう。実のところ、その友人が法哲学のゼミを希望しているという情報を得て、それなら私も、ということでは法哲学の世界に足を踏み入れた。当初は社会学に関心があつたにもかかわらず法哲学に進んだのはこのような経緯なので、独力で勉強しなければならぬ学生が心配である。前期の後半には

部分的に対面講義が認められるようになったので、一年生に大学へ来る機会を提供しようと、なんとか対面の授業を組んだ。先日、弊学で戯曲を読む講座を開いて頂いている鳥の劇場の中島諒人さんに、コロナ禍でどうやって講義をしたのかを伺ったところ、私と同じように、前期の後半に集中的に対面で講義をされたとのことであった。五月に『12人の優しい日本人』のリモート朗読会がyoutube 上であったので、オンラインで戯曲を読むというのも無理ではないのだろうが、事前に同じ空間を共有することなく、いきなりオンラインで読み合わせというのでは戯曲の面白さは削がれる。

読書会もオンラインで開催されるようになった。読書会というより書評会といった方が正確かもしれないが、例えばヴァーミユール『リスクの立憲主義』(2013=2019)、勁草書房)について、若手の憲法学者をコメントータに迎え、訳者の吉良貴之さんが応答する形でオンライン書評会が開かれた。開催時間がちょうど出張から鳥取に帰る飛行機に搭乗する直前だったので、羽田に向かうモノレールに乗りながら参加した。コメントータも福岡など各地からアクセスしており、場所を選ばず呼びたい人を呼ぶことができるし、録画をしておけば、その時間に都合が悪かった人も見ることが出来る。その他に、那須耕介(橋本努編『ナッジ!?!』(2020、勁草書房)、山本貴光

吉川浩満『その悩み、エピクテトスならこう言うね。』(2020、筑摩書房)、隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』(2018、星海社新書)の書評会もオンラインで参加した。どれも予定の時間を延長し、かなり自由に著者自身に質問することができた。実に「アカデミー」(中世の大学とは異なる17-18世紀のそれ的であり、知の共同体に貢献しているという感覚が楽しい。著者の顔を見て声も聞けるといいうのも、「あの人がこの文章を書いたのか」と思いながら本を読めるので非常にありがたい。私は文字を頭の中で音読する方なので、まさにその人が頭の中でしゃべり出す。質問するにあたって、対面の読書会だと、記憶の曖昧さゆえに質問を躊躇し、モヤモヤしたまま散会する羽目に陥りがちだが、オンラインではかなり正確な情報をもとに質問することができる。例えば、H.L.A.ハート『法の概念 第三版』(2012=2014、ちくま学芸文庫)を毎週一章ずつ読むオンライン読書会に顔を出しているが、研究室の資料を手元に置いて参加できるので、誤訳に惑わされて無駄な議論に時間を費やしてしまうことを回避できている。オンライン化がもたらした恩恵である。

ボブ・ディランからドミニク・チェンへ

松田 裕史

(高校教員)

敵視も無視も処刑もしない
きみとは、ベイビー、心から
友達でいたい、それだけさ

この調子で六連目まで続いていくが、昨今の教育現場への痛烈な批判にもなっている気がしてならない（もちろん、ディランにそんな気はないのは僕も重々承知している。）二連目以降で気になる言葉を拾っていくと次のようになる。

「怖がらせるも、強ばらせるも

引きずり落とすも、干からびさせるも

しばりつけるも引っぱりおろすも本意じゃない」

「分析も分類もする気はない

決めつけない、売り出さない」

「追跡、追求、追従もしない

はずかしめない、はじき出さない

「線引きするのも限定するのもしたくない」

型にはめ断定する、分析し分類して決めつける、線引きして限定し追跡する……これらのことが生徒のためになっ

ているのであればよいが、そうすること自体が目的にな

り手段と目的が転倒すれば、教師と生徒の関係は壊れる。

ボブ・ディランの全自作詩（三九〇曲）の訳本『The Lyrics』（全二冊）が三月に刊行された。訳者は佐藤良明。トマス・ピンチョンの『重力の虹』や『ヴァインランド』等の、翻訳が不可能に近い英文を訳してきた翻訳家だ。いつか買って読みたいと思う気持ちもいつの間にか消え入りそうだったが、月刊のある英語教育雑誌に佐藤氏によるディランの詩一編とその訳・解説が毎月載ることになった。一連目を読み始めると思わず引き込まれて最後まで読んでしまうことが初回から続いている。

八月号では「All I Really Want to Do」という詩が紹介されていたが、読んでいてドキリとさせられる言葉が連なっていた。一連目は次のように訳されている。

きみと張りあうつもりはないし

いばる気も、いびる気も、こびる気もない

型にははめない、断定しない

しかし、市場主義原理に少なからず侵襲されている教育現場の現状はどうだろうか？あるいは、一人一人の教員はどうだろう？別の問い方をすれば、どんな言葉を目の前の生徒に投げかければよいのか、どんな言語空間を作り上げればよいのかということになる。ここで読むべきは教育書だろうが、タイトルに惹かれドミニク・チェンの『未来をつくる言葉　くわかりあえなさをつなぐために』を読んでみた。数年来注目している亘理陽一（静岡大学）という（英語）教育学者がこの本を激賞しているのを知り、読むチャンスを得たということもある。

「共に在る」ためにコミュニケーションはどうあるべきか、言葉によってどのように「果てしない共有地＝ commons」を作りえるのか…そのようなことについて安易な答えを出すのではなく、自身の経験や実践を通して読者の中に新たな問を生み出す言説がちりばめられていた。チェンは次のように言う、「コミュニケーションとは、わかりあうためのものではなく、わかりあえなさを互いに受け止め、それでもなお共に在ることを受け容れるための技法である。「完全な翻訳」などというものが不可能であるのと同じように、わたしたちは互いを完全にわかりあうことなどできない。それでも、わかりあえなさをつなぐことによって、その結び目から新たな意味と価値が湧き出てくる。」（P. 197, 198）

端的に言えばそれは「翻訳」である。そして、本のもう一つのキーワードである「共話」。「対話では互いの話の事後に個々の話者が反省の上で次の発話を決定するが、共話では相互の発話内容が共有の素材となり、互いの発話の最中で反省が働いていく。そこでは、話者同士が互いの知覚の一端を担い合うように、それぞれの知識と記憶を喚起し合う。そうしてコミュニケーションの場が、川の両岸の中間に位置する中洲のような、一種の共有地（commons）として生起する。」（P. 164, 165）

わかり合えることを前提やゴールとすれば、仮にわかり合えなかった時に分断が生じる。わかり合えなさすらも包摂するような空間、活動、言動をどのように作り上げるのか。そして、無条件に、無反省に賞賛される「対話」だけでなく、「対話」と「共話」がお互いを補完するようなコミュニケーションの場をいかに創出するのか。：。「翻訳」や「共話」を起点として共有地（commons）を教育現場で構想／実現したい、「共に」在るために。

『会社の人事』

三砂 慶明

(読書の学校)

何度品切れになっても不死鳥のように復活しつづける作家がいれば、消えてしまう作家もいます。コラムニストの山本夏彦は、よく作家は二度死ぬと書いていました。一度目は読まれなくなつて、二度目は作家が亡くなつてです。

詩集のたまたまいが好きで、よく買っていました。なぜ自分が詩集が好きなのかはわからなくて、いまでもよくわかつてはいませんが、好きな本を持ち寄る読書会をやっていました。右も左もわからない新卒のころです。

紆余曲折の末にたどりついた工作社、『室内』編集部に入社したときに、パソコンの前に坐らされ、じゃあ仕事をはじめようかの段になった際、パソコンってどうやって電源を入れるんですか、と質問したら、先輩たちの顔が真っ青になりました。原稿のタイピング、座談会のテープ起こし、広告デザインをやるためのイラストレーター

や写真を加工するためのフォトショップにDTP……。できないことが多すぎて、何から教えたらいいかわからないと先輩たちが頭をかかえていたときに、手をあげてくれたのが、『室内』のアートディレクションを手がけておられたアキタ・デザイン・カンの秋田寛先生でした。

秋田先生が、おそらく冗談で、仕事が終わったらいつでも来ていいからね。パソコン教えてあげます、といつてくれたのを真に受けて、迷惑をかえりみず、本当に毎週お邪魔していました。

工作社の仕事がおわつてから終電までの間、第一線で働くデザイナーにパソコンの使い方からデザインを教えてもらおう幸運。いま思うと、夢のような時間ですが、そのときのノートを読み返すと、本当に恥ずかしい質問を繰り返していたようで、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

先生たちが素晴らしかっただけでなく、本物のプロに、実戦のなかで教えてもらえるのは、環境としても最高で、物覚えが悪い私がメキメキと上達して、『室内』の先輩たちも私たちも通いたい！と羨ましがられました。

アキタ・デザイン・カンの夕食は遅く、二十一時になると全員分の出前をとって、みんなで晩御飯を食べる文化がありました。アキタ・デザイン・カンの社員でもないので、秋田先生の好意で私の晩御飯も一緒に用意して

くださって、自分の給与では食べられないおいしい御飯をご馳走になりました。夕食会のときに、コーヒーをご馳走になり、コーヒーといえは金子光晴の無題の詩があります、と山之口獏とのひと時を描いた詩を紹介しました。そういうのもっとやっつとリクエストをいただき、以来、詩集を鞆につめて行って、短い時間ですが食後に簡単な読書会をやりました。

現代詩は難解なイメージがつきまといますが、そのイメージを根底から覆してくれたのが、「荒地」の詩人、中桐雅夫の詩集『会社の人事』でした。サラリーマンにとって人事ほど重要なことはいないでしょう。

「絶対、次期支店長ですよ、あなたは」
顔色をうかがいながらおべっかを使う、
いわれた方は相好をくずして、
「まあ、一杯やりたまえ」と杯をさす。

(中略)

日本中、会社ばかりだから、
飲み屋の話も人事のことばかり。

サラリーマンの日常を、人生を見開き二ページでぬきとった詩は、本当にそうだ、と思えることばかりで、この本が今も絶版になっているのが、信じられません。こ

の詩集がずばぬけていいのは、会社のことではなくて、人生について書かれているからです。「何年かまえから机の引出しの奥にある一枚のメモ用紙が捨てられない」からはじまる「シモーヌ」という詩には、結婚したばかりの娘が借りていった本のこと書かれています。シモーヌとはシモーヌ・ヴェイユのことで、母が読み、父が読んだ本を子どもが読むようになり、その子どもも三人の子の母になっていく、過程が数行で記されています。末尾の、

「愛は慰めではない、それは光である」

というシモーヌの引用が、閃光のようで、このページを開いて読むたびにはじめて読んだときの感動が押し寄せてきます。誰も復刊してくれないなら、いつか自分を出してみたいと思う、詩集の一冊です。

サラリーマンの死

萩原 俊郎 (倉吉市在住者)

机周りのものを風呂敷に包むと、花束を手にした元部下の女性社員があなたに駆け寄って来る。「課長、お世話になりました」「これからお元気で」。同僚たちの拍手に包まれ、あなたは少し寂しい笑顔を浮かべながら、長年なじんだ職場を後にする。

家では妻が珍しく玄関先まで出迎え、『お父さん、長い間、ご苦労さま。ビール、冷えてますよ』といつになく優しい。仕事人間で家を空けてばかりだった。これからは二人であちこち旅して回ろうか。

庭といつても猫の額ほどの広さしかないが、「盆栽をやるにはちようどいい」。そう自分で言って、自分で苦笑した。「それじゃまるで年金暮らしのじいさんだよ」いや、あなたは明日から本当に年金暮らしに入るのである。「まあまあ、上出来じゃないか」。いろいろあったが、わがサラリーマン人生に悔いなし…独りうなずく。

まるで小津安二郎の映画みたいで、いささかステレオタイプかも知れないが、少し前まで「サラリーマンの定年」というと、こんな光景が頭に浮かんできた。「私も

いずれ、そうやって送り出されるんだ」。そう思っている方もまだ多いだろう。間違いである。

こんな光景は今の日本の企業では、ほとんどお目にかからない。「現実」はこうだ。

六〇歳定年の日、あなたは課長に呼び出される。彼は新入社員の時から鍛えてやったが、今ひとつ仕事ができなかった。だが、あなたは五五歳の「役職定年」ですでに管理職から外され、今では彼が上司だ。

ねぎらいの言葉と思つたら、「あなたの再雇用後の基本給は次の通りです。総務からの連絡通り、まずハローワークの高年齢雇用継続給付金の申請をしてもらいます」。渡された紙を見ると、初任給より低い給与に息をのむ。

定年になつても住民税などはしばらく現役時代の給与水準で決まるから、かなり重荷となる。給与の減り幅に比例して失業保険から出る給付金(といつてもスズメの涙だが)は、それを補う頼みの綱である。

結局、定年の日、あなたは何事もなかったように退社し、翌朝、何事もなかったように出勤した。

だが、あなたは昨日伝えられた給与のことが頭から離れない。「これまで通り出勤し、同じように働いているのに…」。元部下の課長は、これという仕事をさせる気

もなく、時折補助的な仕事を言いつけるだけ。働く意欲は急速に失せていった。年金の満額支給まで、あと5年もある。

帰宅して妻に今の境遇を訴えると、「じゃあ、辞めてあと5年、どうやって暮らしていくの。あなたの給与が減った分、私もパートで頑張っているんだから」とにべもない。家のローンの一括返済と子供の教育費で退職金の半分を持っていかれたが、定年祝いどころか旅行に：と妻を誘うと、「私もいろいろ付き合いがあって忙しいし、先々のことを考えるともつたないでしょ」とあっさり断られた。

定年前に比べ、出勤するあなたの足取りは重い。わがサラリーマン人生に悔いあり：独りつぶやく。

2013年に改正された高齢者雇用安定法で、企業には六五歳まで「雇用確保」が義務付けられた。「これで働きたい者は働けるようになる」と歓迎する声も当時はあった。

具体的には「定年の廃止」「定年年齢の引き上げ」「継続雇用」のいずれかを企業側が選ぶのだが、「定年廃止、引き上げ」を選んだのは一部で、大半の企業は「継続雇用」を選んだ。

「継続雇用」にはさらに定年前と同じ待遇でそのまま

働ける「勤務延長」と、いったん雇用契約を切り、新たな待遇で1年ごとに契約更新しながら働く「再雇用」の二つあるが、大半の企業は「再雇用」を選んでいる。なぜか？

法律で義務化されたものの、大半の企業はこのご時世、六〇代の社員など欲しくないのだ。給与は激減、高齢社員向けの業務内容や働きがいなど考慮する気もない。「嫌なら辞めてもいい」というのがホンネである。

「いくら何でも、七〇歳まで働くなんて酷ですよ」。最近、職場で四、五〇代の中堅社員が暗い顔で話しているのをよく聞く。高齢者雇用安定法は、次第に遠のいていく「年金受給開始年齢」と完全にリンクしている。

今年3月、政府は「七〇歳までの雇用を努力義務とする」同法改正を行った。過去のパターンだと、もうすぐ雇用義務化、それに合わせて年金支給は七〇歳に延びる。「七〇歳まで働ける」のではなく「働かされる」のである。

「一億総活躍」「同一労働同一賃金」「人生100年時代」。美辞麗句だらけの安倍前政権が去った後には、『セールのスマンの死』（アーサー・ミラー）に描かれたような寒々とした荒野が残された。

夏のジャンゲル

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

遅めの夏休み。海に行きたいので海に行くことにする。久美浜へ。北へ北へと向かっていたらあっけなくついた。久美浜には中村くんがいる。最近焙煎所を手に入れたらしい。山の中の小屋を買って自力で改装しているという。車は久美浜に入り、しばらくふらふらとあてもなくさまよったあと無人駅についた。油断するとホームに乗り入れてしまいそうな境界線のない駅。「でんしゃくるかなー」と二歳児がのんびりつぶやく。行くということだけ言つてとくに待ち合わせなどしていなかったので中村くんにメールを送る。しばらくすると前に会ったときと何も変わっていない寝起きのひとが現れた。「ここは地元の人を使わない駅ですね」など言いながらしばらくへらへら笑いあう。遠くから踏切の音。小さな駅には大きすぎる電車がやってきた。でかい音。逃げる子ども。どこいくんや。

さっそく焙煎所にいくことになった二台の車。久美浜の町を抜け、久美浜湾をぐるりとまわっていく。途中、とつぜん右手につるんとした芝生が広がる。海に面したゴルフ場。芝生は綺麗だけど自然を感じることはないね。到着した小屋はわさわさわ茂る雑木林を背にぼつんとたずんでいた。小屋の周りにはいかにも工事中らしく取り外した換気扇やコンロが無造作に散らばっている。ワイルドなおままごとが始まった。「これはアケビですかね」「あ、栗みたいななんもあるね」しばらく裏山と巨大な蜂の巣を眺める。隣との境界線もないもじやもじやとした空間。おーいと呼べば誰か出てきそうな、でもどこまでいっても誰もいなさそうな山。すぐにここでこれしようや！みたいなことは言えない。でも頭のどっかに置いておきたい景色やな。いつかここでなんかしてやろう、とか考えている。持ち主には内緒。

山。中学生くらいの時、たまに裏の山に入っていた。犬の散歩に。かろうじてわかる登山道にはいりリードを放す。走り出す犬。急にやってくる静寂。それからいろんな音が聞こえ始める。上の方を抜けていく風。そのへんにいるのは鳥かな？ 虫かな？ 犬が帰ってくる足音。土の匂い。いまここで必要なものは大体すぐに手に入る。丈夫な木の枝、とか。なにもないけど全部あった。

「多様性」についての話を聞く。話をききながら「多様性」のことしか考えてないのかもしれない。2時間聞いて頭に残ったのがその言葉だけだったのか。ひとつの作物だけを育て収穫する畑と、要るものもいらんものいるんなものがごちゃごちゃになったジャングルはどちらが豊かなのだろう、みたいなこと。

店の本棚を眺める。ごちゃごちゃしとんなあ。何回追加してもすぐに売れていく本がある。そのとりにまったく売れない本もある。どっちも必要。

おもての通りに入る。いろんな家がある。町内の人はだいたい顔わかる。新聞屋。ライブハウス。呉服屋。染工場。小学生。いいバランスやな。

たまに本を注文してくれるお客さんは「F書房にいっぱい積んであったんおもしろそうやったから」とか言う。その場で買えばいいのにわざわざ。べつの人は図書館で読む本、通販で買う本、うちに注文する本がある。その基準はわからない。なににせよ豊かやな。

「これ取り寄せてくれる？」と言われると、さあどこから仕入れようかを考える。Rは次の日に届くけど利益があんまりない。Kは利益がいちばんあるけど扱ってる出版社が少ない。いちばん融通がきくYは送料がかかる

からある程度まとめて注文せなあかんし時間かかる。Nは一冊から頼めるし返品もできるけどたまに届かなかつたりする。本と、頼んでくれた人の顔を思い浮かべながら、いい時間。どこにもなかったらMに買いに行く。それは利益ない。Mに行く口実ができるからまあいいじゃない。いろんなところから届くいろんなダンボール。カフルやね。全部茶色いけど。

SさんとIさんはSNSの使い方もいいねえ。毎回ちゃんと本の紹介しててえらい。Hさんは脳みそのまま垂れ流しみたいになってるねえ。Kさんはアカウントあるけどなんか書いてるん見たことないな。Oさんは人を笑かすことしか考えてないんちゃうかな。みんなのみてたら自分が世界に向けて言いたいことなんてひとつもないってことがよくわかんねんな。そうそう、中途半端にしか読んでない本のこと書くのも嫌やねん。みたいな会話を本屋仲間とだからする夜。この会話もジャングルやねえ。迷宮入り。

八代日記 (七)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

九月某日

配達業務のために初めてハイエースを運転した。もともと車の運転は得意な方ではないので最初は怖かったが、目線も高いし、慣れると非常に快適だった。荷物もたくさん載るし何ていい車なんだ！バンドのツアー用に自家用車としてこれを購入したM君のことを思い出した。五年前に東京から帰郷した際はペーパードライバーで（免許はオートマ限定だし）、通勤するだけでも手に汗握っていたし、車庫入れなんて全然できなかったのだけど、ハイエースで配達する仕事に就くなんて当時は想像もできなかった。

九月某日

台風十号がやってくる前に店の窓を養生したりの作業。作業後は店を早くに閉めて全員退勤。これまでにない強

烈な台風だとのことで翌日は停電の対応や片付けで仕事にならないだろうと思っていたが思いのほか被害は少なかった。予想外の台風の弱まり方だったらしいが無事になにより。台風、年内にあと1回くらいやってくるだろうか。できれば来ないでいただきたい。

九月某日

売り上げの低迷により近隣の書店が閉店することのこの辺りは八代駅から近いのだが、人通りはかなり少ない。

地方小都市の商売はなかなか厳しい。八代もアーケード街はほとんどシャッターが下りているが、YだとかEだとかDだとかのショッピングモールや大型スーパー、均一店には車が停めきれないほどの人出がある。そんな店ばかり使うのは自分の首を絞めるだけな気がするのだけれど、どうなんだろう。と書いていたら、モールでもテナントが減少し空洞化しているというニュースを確認。時代は変わる。

時代は変わり、仕事や商売へのアプローチを考え直さないといけないとは思うけれど、バンドについてことは全然考えが変わらなかつたのがコロナ禍でいけばんホッとしたことだった。もうバンドとか音楽とかに興味がな

くなつちやうんじやないかと思つていたから。むしろよ
り音楽に興味が湧いている。

九月某日

長いこと生ビールを飲んでいない。飲みたい。十分に
お隣と間隔の取れそうな八代の居酒屋を見つけないければ
ならない。

日曜日には旅に出ようぜ

むくれるあの子を連れだして

旅に出よう

日曜日にはどこへ行くこうか

仕事のことなど忘れて

旅に出よう

煙る道を通り抜けて

夜更かしどもにはまるで用はないのさ

お先に失礼

日曜日には旅に出ようぜ

狭い部屋を抜け出して

旅に出よう

日曜日には山へ海へあの町へ

だけどああ天気はすでに曇り空

まるで気にはしないのさ

日曜日には君と朝も早よからフラフラするまでハイハイ

暑いつらい足が疲れて棒のよう

まるで気にはしないのさ

煙る道を通り抜けて

夜更かしどもにはまるで用はないのさ

お先に失礼

日曜日にはどこへ行くこうか

狭い部屋を抜け出して

君を連れて

(ケバブジョンソン 「My Sunday GaI」 作詞：杉浦真寛)

おあついのがお好き

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

る御仁がある。一冊の本のために家財を傾ける人あれば、人を殺める輩もある。枕辺から片時も離さず、これ愛撫に勤しむ向もある。偶像崇拜めいた趣は確かにある。

さて、

山高きが故に貴からず
樹あるを以て貴しと成す

であれば、

本、厚きが故に貴からず
文字あるを以て貴しと成す

とでもなるだろうか。

お説御もつともながら…
分厚い本を見ると心が騒ぐ。

一種のフェティシズムでもあろう。

本は呪物たり得るか。

革装、天金の豪華本を繻くに、マスク、手袋を以てす

厚いからとて、『介護福祉六法』三千五百頁にときめく訳ではない。辞書・事典や人事興信録の類も亦然り。

やはり中身との兼ね合いが要る。

畏し鈴木信太郎翁が、美しい本は素材と装幀と内容で決まる、と宣うたとおりである。

となれば、

文学に究まる。

事の初めは、『寺山修司全詩歌句』だったか、『月球儀少年』だったか、店頭で見た時は体が震えた。

厚さも厚さながら、装幀も美しかった。

版面は、当時流行っていたマージン無視の読み辛い字組だったけれど。

この所、分厚な本が増えていく：ように思う。

マルテル『ソドム バチカン教皇庁最大の秘密』、『ヒューズIIパレット』『ダンヌンツィオ 誘惑のファシスト』、『ロクベール』『異端カタリ派の歴史』…。

必ずしも、文学書ばかりではない。

愚考するに、諸式が高値になって、本来なら上下二巻にした所、とても読者が二冊は買ってくれまい、上巻だけ売れて、下巻が大量に売れ残っては目も当てられない、と判断した結果ではあるまいか。

元版が二巻本で出ていたものを、合本して再刊したもののさえある。マチュリーンの『放浪者メルモス』で、九八八頁にもなる。ただ、B六サイズであるためか、意外に、手にしっくりする厚さ、重さではある。

野放図に厚ければよい、という訳ではない。自ずと節度は問われる。

日本の定義ではないが、サイズはB五を上限としよう。とはいえ、『日夏耿之介全集』は重厚に過ぎ、第三巻など千頁を超える。片手で持ち運べば、肩を脱臼し兼ねない。やはりB六、四六辺りが望ましい。厚さは、表紙の短辺の長さを超えてはならない。表紙の幅より厚い本なんてバランスが悪すぎる。そして、片手で背を掴める程

度、つまり親指と他の四本の指で支えられる幅。紙質にもよるが、七、八百頁くらいが順当な所だろう。まあ、世の中には、二オクターヴを片手で弾いた、とかいうどこかの作曲家のような仁もいるのだが。

もとより、私見である。JIS規格がある訳ではない。人それぞれに噴火獣。

筆者が二十二年くらいの間、見惚れたのは、

『江戸怪異綺想文芸大系 第五巻』 一〇八九頁

『井上ひさし笑劇全集』 八一三頁

『ランペドゥーザ全小説』 五六五頁

の三冊。

『メルモス』は、元版を持っている癖に、厚さへの想い黙し難く、またぞろ買ってしまった。

莫迦である。

鳥取あれこれ

その五十

内田 克彦 (地域研究家)

白川渥が鳥取大地震のことを書いた短編小説「北の町」の初出は『若草』一九四三年一月号(奥付には「昭和十八年十月二十三日印刷納本 昭和十八年十一月一日発行」とある)である。出だしは次のように始まる。

震源が鳥取であつたことを、計吉たちは翌日の朝のニュースで知つた。神戸では電燈の傘がしやくれる程に揺れたのである。(略)列車の不通、家屋の倒潰、死者の數、市内數箇所に起きた火災が未だ鎮まつてゐないと言ふ風なことをラジオは叫びつづけた。

当時は報道規制が敷かれていたはずであるのに、震災後まもなく小説が発表されていることは不思議であつた。因みに、矢部貞治は『矢部貞治日記』の「九月十一日(土)晴」の項に、次のとおり書いている。

朝刊によれば、鳥取市を中心として大地震があり、被害甚大の由。

大学に行つたら、湯谷が電話して来て鳥取のことを

噂したが、真相不明。然しひどいらしい。

今年の八月二二日付け「朝日新聞」社説に、一九四四年一月二七日の「東南海地震」と翌年一月二三日の「三河地震」が「隠された地震」と呼ばれた、と載つていたこともあり、鳥取大地震の場合はどうなのか、調べてみることにした。

二〇〇九年発行の山下文男著『太平洋戦争史秘録 隠された大震災』には、次のようであつた。

戦況が悪化していたこともあつて新聞に発表された被害写真は一枚だけだつたし、検閲のため被害情況に關する詳しい報道もなされなかつた。そのため、平時なら当然行われたはずの救援活動も全国的にならなかつた。

ところが、二〇一四年(二〇二〇年新装版) 発行の木村玲欧著『戦争に隠された「震度7」』には、次のとおり書かれている。

戦時報道管制下に発生した震災であつたが、この時点で本土空襲などはほとんどなく、常に命を脅かさ

れるような緊迫した事態を、本土の日本国民が感じることは少なかったようだ。それは新聞記事の規制にも表れていた。一面トップになることこそなかったものの、地震そのものの情報、被害情報、対応状況などの震災に関する記事を、地元紙である「日本海新聞」はもとより全国紙においても連日掲載していた。

また、二〇一二年発刊の木村ら編『日本歴史災害事典』では、「鳥取地震」の中の「新聞報道」の項で、「詳細に地震情報や被害程度が報道されていた」と分析している。

県立図書館で所蔵している当時の新聞の縮刷版にあたってみることにした。まず『朝日新聞東京本社版』では、

○十一日(土)朝刊三面(四面中) 「鳥取市激震 五千戸以

上が倒壊して火災 山陰線も一部不通」の見出し

○同 日(土)夕刊二面(二面中) 「火災は今晩鎮火 死者四百名」 「迅速な手配 復興、救護進む」の見出しと

「震災地へ見舞金」の囲み記事

○十二日(日)朝刊三面(四面中) 「鳥取市の復興色 掛小屋にも隣組の協力」の見出しと大谷友衛門丈の死亡

記事

○十三日(月)朝刊二面(二面中) 「鳥取市と鉄道連絡 けふから因美線経由で臨時列車」 「内相、起ち上れと激励」 「出征軍人家族へ救護」 「昂る都民の同情」の見出し

とあり、『毎日新聞大阪版』では、近いこともあろうが、

○十一日(土)朝刊三面(四面中) 「鳥取市激震 倒壊、焼失約五千戸 軍隊出動、救援に活動」 「山陰線不通 沿線各地に小被害」 「鉄道運行状況」 「福知山から救援列車」等の見出しと「延焼した丸由百貨店」の写真

○同 日(土)夕刊二面(二面中) 「死傷千三百 郡部は約三百 震禍の鳥取・一路復興へ」 「目抜通倒壊」 「救援に政府米一萬石 農林、商工、鉄道省の応急対策」 「救援ぞくぞく」の見出しと「震災地へ見舞金」の囲み記事

○十二日(日)朝刊三面(四面中) 及び○十三日(月)朝刊二面(二面中) でも同様に『朝日新聞』より詳しく書かれている。

九月一〇日付の「毎日新聞」には、「死者の名こそ生きた証し 1000人超名簿作り開始 県・市」とあり、九月一二日付の「日本海新聞」には、「80年の節目に記念碑を 賛同者募る渡辺さん 戦乱で消えた計画」とあった。今後の進捗に期待したい。
二〇二〇・九・一七

戦禍と楽人 (1) 幸明氏の場合

武中淳彦(秦阜梅林 本名)

(楽人)

青年期、僕には大変影響を受けた三人の先人がある。

時代背景も有り皆さんお若い頃、其々の戦火を潜り抜けて来られたのだが、どの方も晩年、僕に個人的な競争体験を漏らして下さった事が今しんみり想い出され、其れは決して偶然でも無かつたろうが、記憶の薄れない内徒然に書き遺してみたいと思う。

I

安部幸明氏は1911年広島生まれ、東京音楽学校(現、芸大)で学んだチェリスト上がりの作曲家。留学経験皆無にも拘らずドイツ語は頗る流暢で、其れもその管専攻のチェロ、作曲、指揮はHキントラーやKプリングスハイム等何れも来朝されて居た独逸の巨匠達に直接師事、上野の駅前留学畏るべしである。

同期には歌聖、平井康三郎(高知出身)氏がおられる明治生まれの古参、62年生まれの僕とは実に半世紀以上の年齢差があった。

II

在壇中、僕は往時日参してゐた老舗ドブリンガー※古

書部で或る午後、一見して邦人と解る作家名を冠する大判の交響曲スコアを手にして、其処に広がるシンフォニックな手法の手堅さ、雄大さ、東洋的な風情の奥ゆかしさに舌を巻いた「アベコウメイ、いったい何者?」：やがて、邦人には珍しく交響作品やら十余曲に達する弦楽四重奏を代表曲とする稀有な器楽作家で有る事を知り、日本楽壇のメイストリームに余り威圧的な存在感を漂わせない、寡黙な職人と言つた感じで飄々とした印象は、作品も人物も同一であつた：

III

帰国後、氏を識る友人を介し幸いにも知己を得る事が出来、其れ以降永きに渡り、時にはご助言頂き、腰を押しされる、佳き先達であられた氏は、此のクラスの邦人としては驚く程、謙虚さに溢れた、腰の低い、まさに作曲の虫であつた。創造の世界で、唯我独尊、ペンのみにかけてご自分の脚で立ちやうて来られた自信と誇りから来る余裕がそうさせるのか、生意気盛りで凡そ恐れを知らない、何も出来なく若いだけだつたその頃の僕とは何もかも対照的。

そんな氏が、珍しく「武中さん、言っておきたい事がある。」静かな眸は真剣だつた：

IV

「戦争が始まつて、時局が差し迫つて来る迄は、私の

周りもそんなに、外地であんな酷いことになってるなんて！何も知らされない内に、少々不便な事が増えていく…位の感じで過ぎて行っただんです。

纏て親しい者や友人、身内にも不幸が広がり、人並みに戦禍に在る暮しらしくなつて行つた。此処迄はあの時代の人ならば誰もかれも経験した話…

唯、最も自由で、或る意味浮世離れな生活をして居た筈の、自分の創作に気がつかない内に少しずつ少うしずつ、見えない枷が重く大きくなつていて。総堀を埋められる感じ。ああいう時代はね、いつか気がついてみたら、戦意高揚を煽る軍歌だけが音楽と認められる、狂気の世界になつて居たんです、いや他人事ぢや無いですよ、笑い事ぢやない。調子の良いジャズも恋を歌うシャンソンも駄目、ベートーヴェンやブラームスの交響曲も弦楽四重奏もまるで無価値なそんな闇の中。仕舞いには僕みたいな、最も大衆受けしない類いの作曲家にさえ、軍歌を書きよう、当局から呼び出しが掛かり最初は要請、後には命令に成りましてね、嫌々乍ら二曲、三曲と書かされました。後にも先にも最も、思い出したくもない、忘れて了いたい辛い仕事でした…」

V

「尤も、普段から歌曲の苦手な私、元々ポピュラーに向かない地味な歌でしょう、況してや戦意高揚とか…無

理無理という訳で余り採用もされず、例えされても大して人気も出ず…其れは其れラツキーでしたが…嫌ですよ、一生懸命打ち込んで来た大好きな音楽で、将来ある若者達を死地に追い遣るなんて！つくづく思うんですけど、戦争は絶対いけない、唯一言に尽きます。」日頃物静かな氏の眸は虚空を見据え微かに震えてゐた…。

9

2020.08.2

※ドブリンガー 楽都ヴィーンの代表的楽譜楽書専門店
の老舗。ハイドウンからブルックナーに至る母国作家作品のスコアを中心とする出版事業にも信頼を置かれ権威と謳われている。

今回の二枚 ①安部幸明 交響曲第一番 (1957)、シンフォニエッタ (1964) 嬉遊曲 (1951) ※ d. ヤブロンスキー 指揮 ロシアフィル orch. a. ヴォルコフ、 a. sax. ※ (rec. 2005)

②同 弦楽四重奏曲第七番 巖本真里 SQ (1968)



マンデルブロー没後10年〜画家と科学者の眼

芝野 浩貴

(地球探険家)

サント＝ヴィクトワールの絵をセザンヌは油彩・水彩合わせて90点弱描いている。石灰岩質の南フランスの1000mほどの山のどこに魅せられたのか? 「自然は円柱と円錐と球で成り立つ」と言ったセザンヌの言葉をフィリターに絵を眺めると、幾何学的図形が散りばめられているのがわかる。複数の視点での美術的表現を探索したセザンヌには、毎回違う風景が見えたのだろう。風景画の師匠であるピサロが後にスーラの点描を取り入れるが、それを点としての筆触分割だとすれば、セザンヌは面としての筆触分割である。自然光が消えないように、ものや平面が一つの中心点に集中するように描き続けた。晩年の住処であったシャトーノワールを構図に入れた時は、シャトーノワールを黄土色、ヴィクトワールを青色をベースに彩色している。赤と黄色の中に空気を感ぜさせる青系統の色彩を入れているのは、人工物の城を包み込むよう

なヴィクトワールで自然の深さを表したのだと思う。そんな複眼的なセザンヌなら、「富士山を動かすにはどうしたらよいか?」というプログラマーへの問いを山を円錐台と見立てて解決するだろう。

一方では、マンデルブローは、「雲は丸くなく、山は円錐形でなく、海岸線は円でなく、樹皮は滑らかでなく、稲妻はまっすぐに走らない」と言い、ラフネスで自然を記述しようとした。フラクタルの祖である。樹木や山がフラクタルなら画家の作品もフラクタルだとして、葛飾北斎の、神奈川沖浪裏、やカンディンスキーの絵を例として挙げている。

アインシュタインの時代は水に浮かぶ微粒子の動きも説明できなかったが、ブラウン運動をデジタルとして捉え、ランダムウォークを考えることで時代は動いた。右へ移動する確率を p 、左へ移動する確率を $1-p$ だととして、直線上を酔っ払いのように歩く時、原点に戻る再帰確率 P_n となるので、 $P_n = p^n + (1-p)^n$ で右と左へ移動する確率が同じ時は、いつかは原点に戻ってくることになる。試行が2回の時は右と左右の2通りが原点に戻ることで、その確率 $2 \times (1/2)^n \times (1/2)^n$ になることは、中学でも学び、試行の種類や回数を増やして、高校では独立試行の問題

となる。ランダムウォークの再帰確率の問題は簡単ではないが、2次元ではいつか戻ってくる、3次元では戻ってこないことが証明されている。

そこで、ブラウン運動と繋がる。ブラウン運動は、微粒子を浮かべる気体や液体の種類に寄らずに起こる。生きている微粒子でなく、生命のない微粒子もブラウン運動することから逆に分子や原子の存在が明らかになった。ウィナーは離散型のランダムウォークの極限となる確率過程としての確率論を確立し、サイバネティクスを唱えた。多くの粒子の影響がブラウン運動の複雑さを生み、確率微分から確率積分の手法は金融工学にまで使われた。フォンノイマンも通信工学、制御工学、心理学、社会学、生体工学、神経生理学などに研究対象を拡げ、ゲーム理論、エルゴード理論、モンテカルロ法などを確立。ノイマン型コンピュータについては言うまでもないだろう。ウィナーとフォンノイマンは共に、情報・通信・制御の流れを軸に研究したが、その時に避けられないのがクロード・シャノンである。シャノン以前にはノイズの多い回路は転送されるメッセージの一部が失われると思われていたエラーを修復する最適な符号が求められるようになった。シャノンの通信路符号化理論(ブロック長を無限化して誤り訂正符号化すれば、正しく伝わる符号化が存在する)の影響である。前述のマンデルブローはシャノンがこの定理を

生み出す時に手助けをしている。より真実に近いデータを守るのではなく外れ値にとことん注目した研究姿勢が相乗効果を生んだのだろう。

2006年マドリッドでの国際数学会議で、マンデルブローを見かけた。この年、奇しくもガウス賞が創設され、第1回の受賞者は日本人の伊藤清(伊藤の公式はブラウン運動にも関係有り)でフィールズ賞受賞者の一人は、ウエンデリン・ウエルナー(2次元ブラウン運動の交差指数の決定)であった。10年前の2010年10月14日に亡くなったので、後進のウエルナーが自分の課題を解決してくれて安心してこの世を去ったと推察する。その場に居合わせた外れ値の参加者ではあるが、「ノイズ、ランダムネス、情報」とことん向き合った先人の業績を振り返りながら、コロナ禍での情報への意識が出鱈目なことを危惧している。

「メッセージの価値は情報にあるのでなく、明白な冗長性にあるのでなく、埋もれた予測困難な冗長性にある」(チャールズ・バネット)

デヴィッド・グレイバー逝去の日に送稿。合掌

置いてある。

坊ちゃんとか猫から卒業して、より概念的になって来ると、恐らく(嘗ての?)自分自身を重ねた「高等遊民」(働く必要のない階級に属する人々)を主人公とする、内省的作品が多くなるが、彼等にも特筆するようなハプニングは起こらない。

それが『耽読者の家』を読み始めて、偶々読んでいた漱石が重なった所以である。

『彼岸過迄』、では主人公の行動を、「・・身分が定まらないので、気の落ち着く背景を持たない彼は、朝から晩まで下宿の一間に凝と座っている苦痛に堪えなかつた。用がなくなつても半日はせひ出て歩いた」、と記述し、本人の言葉として「・・何か驚嘆に値する事件にあいたいと思つているが、いくら電車に乗つて方々歩いても全く駄目だね。掏摸にさえ会わない」と言わせている。

その代わり、なのか、同じ下宿の住人だの、学校時代の友人だのの体験談に心躍らせるものの、自分は無為ながら、着々と教養を増やし続けており、内的な成長では自分が優つている、と、ほぼ常に心理的均衡を保とうとするのが可笑しい。

僕は筒井の良い読者とは云えないが、彼が、純文学雑誌の、某著名編集者の薫陶を受け、実験的、純文学的方向へ一時傾いたのは知つている。

その時期に書かれた、より先端的作品も読んだような記憶があるが、自分で実作めたことをしている今、この比較的新しい作

品に、より身近な実験性を感じる。

登場人物達は、読書以外、何もしないので、何も起こらない。故に精神活動も起こりません、では小説にならないが、本は読むので、精神活動は発生している筈で、後半で加わる女子大生が、『嵐が丘』を読みつつ、時に威を正すようであるのは、読んでいる内容に興奮しているから、と男達が笑つ。

筒井の作品に遍在する性的描写は、事後を示唆する、読了後の少女の虚脱で代えられる。

漱石作品中の高等遊民の他者の体験に対する考察、批評等も、つまり書かれる前の本を読むことから得る精神活動、と云えませんか(笑)

いっそのこと、この、今何のどの下りを読んでいて、それがこういう外的な現れになっている、みたいなことを、長々と書いても面白いかな、などくだらないことを考えてしまいました。

カウチに寝転んでアンナ・カレーニナを読み始めていたけど、おもむろに起き上がり前髪を掻き上げる。

やつと駅でアンナとヴロンスキーが会つたかな。

本に目を落としたまま、壁にぶつかりながら台所に消えると、缶詰の桃を持って帰つて来た。

オブロンスキーとリョービンが食事する場面に違いない。

冬のロシアに生の果物はないから、デザートに缶詰の桃を食べる箇所があるからな、等々。

ごはん

あきの素生

(くうねるめがね)



新米の季節がやってきた。水気をふっくらと含んで、つやつやと白く、ほんのり甘い新米の季節だ。

米は研ぎすぎないほうが良いと聞いたから、最初はぎつとかき回してすぐに水を捨て、後二、三回も水を替えたら、鍋に移して水に浸す。こちらに来てから、米はガスで炊いている。五合まで炊けるので、多めに炊いて、余った分は凍らせている。

朝食を長い間パンにしてきた。早く食べられるからだ。朝が苦手なので、パンに助けられてきた。バター、チーズ、オリーブオイルと塩、いちじくジャムやマーマレード、気分によって味を簡単に変えられるのもいい。それを最近ごはんに変えた。なんだか「帰ってきた」という感じがしている。パンも麺も好きだが、ごはん以外を主食にした食事が続いたときは、体調が少しすぐれなくなつた

りする。ごはんに戻すとよくなる。お腹も空きにくい。「ごはん派」という以上に、体が「ごはん仕様」になっている。

一番好きなごはんの友は、という質問があった。私は、たらこ一択。魚卵はどれも好きだが、たらこが一番好きだ。むしろ、ほかにどんな選択肢が、と思うほどだったが、その場でたらこ・辛子明太子を挙げたのは私だけで、ほかの方たちの答えは、納豆、梅干し、海苔の佃煮、なめたけ、ふりかけなど、言われてみれば納得の面々。ごはんの友は実に多彩だった。とはいえ、私の推しは、断固たらこなのだが。

たらこは、あの独特の風味がくせになる。短冊切りにした長芋をたらこ少しの酒で和える。ふかしたじゃがいもをたらこマヨネーズで和えて、とろけるチーズをのせ、さらに粉チーズをふりかけて、オーブントースターで焼く。たらこマヨネーズは、野菜もゆで卵もおいしくする。パンに塗ってトーストしたり、スパゲティのソースにしてもいい。焼きたらこ、たらこの天ぷら、卵かけごはんやお茶漬けにたらこをプラスして、と、いろんな味わい方がある。だがそれも、炊き立ての白米とたらこを充分に堪能した後のことだ。

子どもの頃、「三角食べ」をするようにと教えられた。主食とおかずと飲みものを順番に食べましょう、というあれだ。給食の時間に教わったのだったか。

好きなものは最後に取っておきたい質だ。フライドポテトを長さ順に並べて、短いものから食べていたことすらある。おいしさをよりたくさん味わえる、長いポテトを最後に残していたのだ（カリッと揚がった小さいポテトの方が好みだと気づいてからは、ポテトを冷めさせるだけのこの不毛なおこないはやめた）。ほかの味で書きさせず、なるべく長く、口の中をおいしい状態にしておきたい。あと十日、あと一日とクリスマス朝を待つように焦れてみたい。ほかの人たちがすっかり食べ終わってしまったあと、自分にはまだ楽しみが残っているという状況に感じるちよつとした優越も、「好きなものは最後に」を助長していた理由のひとつだろう。ほかの人は先にそのおいしさを我がものにしていただけだ。理屈じゃないのだ。

そんな中で、ごはんの地位は、とても低かった。当時の私の味覚では、ごはんはほぼ無味だった。「好きなものは最後に」と「三角食べ」は相いれない。おかずだけで味わいたくて、「一品ずつ食べ」ばかりしていた。だから、ごはんは無味のまま、ごはんだけ噛んでいるのを苦行のように感じることも少なくなかった。

いつからか、おかずはほとんど食べたほうがおいしいと思うようになった。気づいたというべきか。おかずの味が丸くなって、箸が進む。後を引く。焼肉、餃子、肉じゃが、とんかつ、焼きそば、スクランブルエッグ、なまこ酢、一品で食べるのが特に好きだったおかずも、今はほとんど食べるのが楽しい。

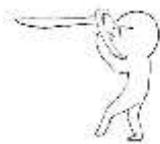
ごはんといえば、おにぎりも外せなかった。『くわすによろぼう』（稲田和子再話、福音館書店、1980）で、
「よろぼうが『ぴつつ ぴつつ ぴつつ ぴつつ』と並べるにぎりめしは、なんとも旨そうに感じる。あれは菖蒲の季節だが、秋のにぎりめしはもつと旨かるう。」



定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示





太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・ 土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

おみやげと替え玉



ドラマリア (座敷わらし)

朝夕の空気が冷たくなり、日赤前の歩道に銀杏がぼつんぼつんと落ちている、秋。秋の気配を感じると、母が入院していた幼い頃を思い出す。当時祖母や姉とバスに乗って遠くの病院まで通った、と初期の号に書いたが、それに関して最近気づいたことがある。

京都の大病院に転院した母のもとへ、まだ幼いわたし達姉妹はほとんど行くことはなかったが、足繁く通う父から、代わりに何度かおみやげを渡された。「ほら、お母さんからやで」と渡されたそのほとんどはぬいぐるみで、事態の深刻さを理解できていなかったわたしは無邪気に喜んだものだ。

けれど、よくよく考えるとこの話にはおかしいところがある。転院後は大きな手術の後で、意識のない状態が続いていたと聞く。そもそも、あれを母親が買ったはずはないのだ。では、誰が？

消去法で推理するに、あれを選んだのは父だったのだろう。道理で、おみやげはことづけてくれるもの、一

生懸命書いた手紙には返事をくれないうし、動物の種類が違っただけで毎度ほぼ変わらない、なんとなく無造作なチョイス。カーディガンを素肌じかに着せてわたしを登園させた父の姿が見え隠れする。帰りの道中で買ったのだろうか。

もつとも当時のわたしはまったく気づかず、「母」からのおみやげを大切にしていた。一番気に入っていたのはコアラの小さなマスコットで、肌身離さず大事に持ちすぎたせいで、ある朝味噌汁の中に落とされた。ずいぶん悲しかった覚えがあるが、茶色くなつたそのマスコットは、今もわたしの身近にある。



・編集後記:

原稿を書いているうちに、すっかり秋らしい気温になりました。今年もそろそろ猫たんぽの時期です。

ドラマリア (編集長)

コロナ・ディスタンスといういままでにない生活と、往來の街の本屋の関係。「まちづくり」のコーナーの動きがにぶり「まち暮らし」の本へと関心が移った感じ。ちいさな幸せの確認でしょうか？

奈良敏行 (発行人)